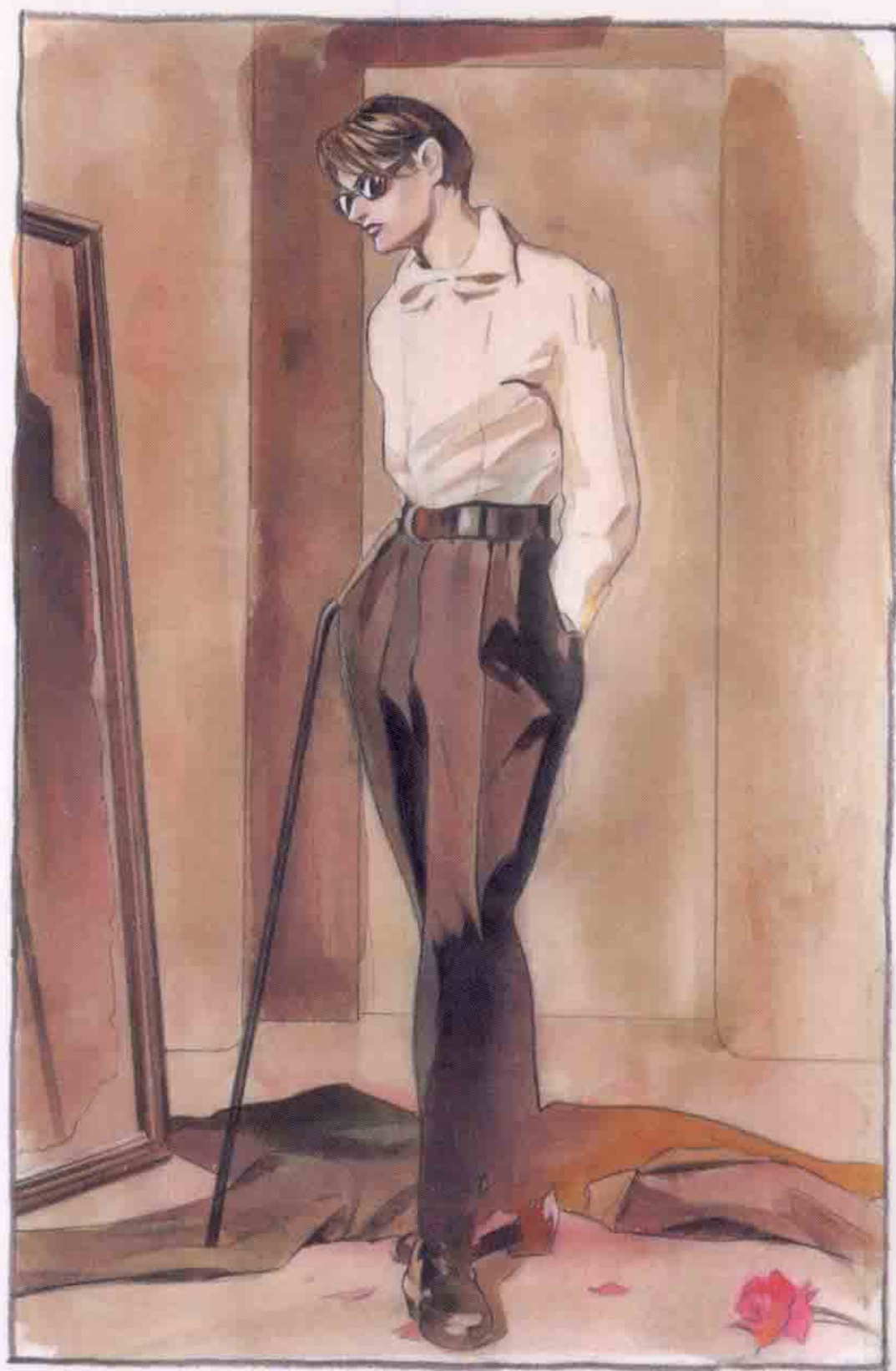


蒼き影のリリース

菊地秀行



中公文庫



中公文庫

あお かげ
蒼き影のリス

定価はカバーに表示してあります。

1998年 8 月 3 日印刷
1998年 8 月18日発行

著 者 きく ち ひで ゆ き
菊地秀行

発行者 笠松 巖

発行所 中央公論社 〒104-8320 東京都中央区京橋 2-8-7

TEL 03-3563-1431(販売部) 03-3563-3664(編集部) 振替 00120-4-34

©1998 CHUOKORON-SHA,INC. / Hideyuki Kikuchi

本文印刷 大日本印刷 カバー印刷 三晃印刷 用紙 王子製紙 製本 大日本印刷

ISBN4-12-203218-0 C1193

Printed in Japan

乱丁本・落丁本は小社販売部宛お送り下さい。送料小社負担にてお取り替えいたします。

中公文庫

蒼き影のリス

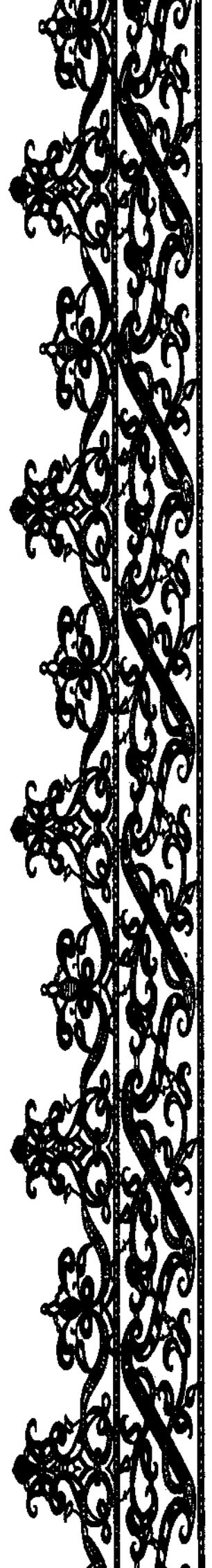
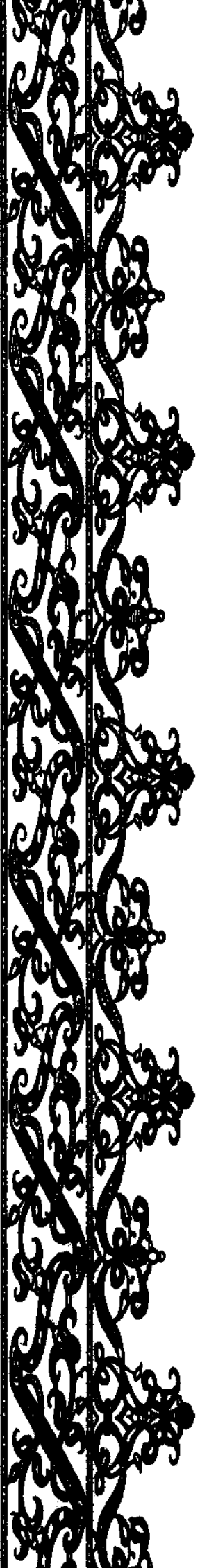
菊地秀行

中央公論社

目次

第一章	「月光」の主人	7
第二章	弔花夫人	40
第三章	闇の跳梁者たち	72
第四章	拷問クルーザー	105
第五章	銀仮面の枢	136
第六章	虚空明暗	166
第七章	妖人 vs. 魔人	201
第八章	白い箸	233
第九章	終りなき夜 よ に	265
あとがき		307
解説		311

蒼き影のリリス



第一章 「月光」の主人

1

ブザーが鳴った。深い水底みなぞこから聴こえてくるような響きだ。暗くて重い。おれも同じ場所から浮き上がらなきゃならなかった。

ベッドに入ったまま、つけっ放しの腕時計を見る。ためいきが出た。
枕元の受話器を取り、

「どなた？」

と訊いた。良心がとがめるくらい無愛想な声だ。これで帰ってくれとありがたいのだが、そう都合良くはいかなかった。

「秋月さんのお宅ですか？」
あきづき

女の声だ。若い。少しは頭が軽くなった。

「表札、表札」

と言った。

「あ。……あの、黒墨^{くろすみ}さんから紹介されました。同じ大学で英文二年の津田^{つだ}川^{がわ}と申します」

奇妙なことだが、おれの頭と感情が群を抜いて鋭敏に——つまり、冴え渡るのは、寝起き後数分に限るのだ。

ドアのところへ行くまでに、来客のイメージは鮮明に形成されていた。

やや蒼味^{あおみ}を帯びた廊下に立っている。細面の内側に配置された目鼻は、とびきりの美人とはいえないが、頭の切れを十分に表現していた。高価^{たか}そうなコートとハンドバッグが身についているのに、やさしそうな娘だった。

「どうぞ」

と声をかけると、娘は小さく頭を下げた。ちゃんと顔を上げ、おれを見つめて微笑した。

戸口をくぐるとき、ドアの方を眺めた。

「三重だよ」

とおれは疑問を解消してやった。

「どうして、そんなに？」

「自分の親も信用できない御時世だからな」

正しくは、外界とつながってるから、だが、口に出さなかった。

おれが取り付けた二つを含めて、ドアが閉じれば錠は自動的に下りる。娘はそれ以上気にする風もなかった。

2DKのうち、十畳間は居間兼応接室だ。すすめたソファに腰を下ろし、娘は、

「いいお部屋ですね。私のところより広くてきれいだわ」

と感心したように言った。

「——オフィスか何かですか?」

「いや。どうして?」

「ちっとも生活臭がしない。あ、男の人の部屋、よく知りませんが」

「たまには、こういう男もいるよ」

「ごめんなさい。お睡眠でした?」

と娘は詫びた。欠伸を噛み殺したのに気がついたのだろう。おれは頭を横にふって、

「三〇分早く浮き世に出なくちゃならないだけだ。——黒墨に会ったのか?」

「はい」

「どんな女だ?」

娘は眉を寄せた。

「——どんなって。会ったことないんですか? あなたを紹介してくれたのは、あの

女性ひとです」

「顔も見ただことがない」

「嘘」

「嘘だ」

と俺は肯定しておいた。ふと気がついて、

「飲みものは？」

と訊きいた。

「あつ。お構いなく」

「世界一うまいものをミスるかも知れないよ」

「なら、お勧めのものを頂きます」

おれは奥のキッチンへ行き、客用のお茶を淹いれて戻った。

テーブルの上に置いただけで、娘は眼を丸くした。

「いい香り。こんなお煎茶せんちゃはじめてです」

「出雲の特産品だ。もつとも、今では何処どこにも売っていない」

「秋月さん、出雲のご出身なんですか？」

屈託のない問いにすぎなかったが、おれは答えず、

「名前をきかせてくれないか？」

と言った。

「津田川由衣ゆいです。学生証出します」

ハンドバッグへ手をのばしたのを止めて、おれは黒墨とのなれそめを尋ねた。

黒墨はくも玻璃——墨とガラスとは面白い取り合わせだが、当人はそんな形容詞の似合うた、まじやない。

三日まえ、家へ電話がかかってきたのだと津田川由衣は答えた。同じ英文学部の学生だと告げた玻璃は、悩みを解決してさしあげるわと、神秘的な声でつけ加えたという。それだけで、由衣は電波の彼方にいる相手のペースに呑みこまれた。わかる。いつもの手口だ。

こんな常識外れの電話に、由衣が絶対的な信頼を抱いたのは、

「あなたの悩み——オカルトとか超自然方面のものでしょうか」

この指摘だった。念のため、玻璃の学生証ナンバーと学部、学年をきき、いったん電話を切ってから、大学の事務局に照会すると、嘘はないとわかった。

「びっくりしました。事務局への電話を切った途端、黒墨さんからまたかかってきたんです。神秘的すぎると思いましたわ」

感嘆を隠さない由衣に、おれは、

「盗聴されてると思わなかったのかい？」

と訊いた。

「まさか。——普通の人がそんなこと」

「普通の人が、見ず知らずの家に電話してきて、いきなり、悩みを解決してあげますなんて言うと思うか？ おまけにオカルトと超自然ときた」

「それは……」

「君、奴——黒墨の学生証のナンバーを訊いたとき、住所と電話番号はどうした？ それこそ普通なら尋ねてみるだろう」

由衣の表情にほんやりと驚きの翳^{かげ}が広がった。人さし指を唇にあてて、そうだわ、と言った。

「そういえば——どうして……」

「訊く気になれなかったのか？」

おれはつづけて訊いた。それが耳に入っただろうか、由衣は虚ろな眼を宙にさまよわせていたが、

「そうだわ。——何だか、訊く気になれなくて」

「次の日に会ったと言ったね。——そのときも？」

「ええ」

うなずいた。上げた顔は真っすぐおれを見た。別の色が表情を支配した。

「わかったわ。……怖かったんです」

認めたくないような声だった。推理小説向きの怪事件が、自分の上にふりかかったみたいな顔つきをしていた。

「でも、どうしてかしら。あんな、きれいな女性^{ひと}。親切に話をきいて、あなたのことも紹介してくれたのに」

「おれのこと——どう紹介した？」

今度はおれが由衣を見つめた。ためらうかと思ったが、この娘は本^ま当^まに育^そちが^いいいらかった。相手を傷つけないように躡^しけ^られていた。しっかりとした声で、

「常識外れの事件を解決してくれる専門家だと伺いました。とつても実力があるって。証拠も見せてもらえました。ただ——」

ここで、につこりした。中々できる技じゃない。

「女性に手が早いから気をつけなさい」

「そう見えるか？」

おれは苦笑しながらカップを口へ運んだ。しっかりとした声が鼓膜に届いた。

「ええ、少し」

「そんなにきつぱり言うなよ。——これでも、君と同じ二年生だ。年齢は少し上だがな」
「それもききました。でも……」

由衣はためらった。これもわかっている。おれの年齢^{とし}を判断しかねているのだ。見ためは確かに彼女とほぼ同じ。だが、雰囲気は、というわけだ。

「いいさ。で、おれをおかしな事件の専門家だと信用した証拠というのはなんだい？」

「黒墨さん、喫茶店で私の手に触れました。そして、あの人が絶対に知るはずのない私の悩みを、その場で言いあててしまったんです」

「それは？」

おれは本題に入ったのを知った。

すぐには答えず、由衣は右手をゆったりしたジャケットのポケットに入れた。テーブルに置かれた長方形の白い布切れをおれはじっと見つめた。由衣は無言で包みをほどいていった。

白い布が花びらのように四方へ広がる前に、中身の素姓は知れた。

長さ二〇センチ、四、五センチ角の木片だ。

「黒墨さんは、これが何かを言いあてたんです」

「火事場か？」

とおれは訊いた。木片は無残に焼け焦げていた。

「いいえ」

と由衣は、はじめて耳にする声で否定した。

「火葬場です。一週間前に姉が亡くなりました。焼いたら、骨の中に——丁度、背骨の位置に、これが残っていたんです」

2

街頭モニターの前で、おれは足を止めた。

銀座七丁目。左手は「資生堂パーラー」だ。午後六時近い平^{ウィーク・デイ} 日だから、中央通りは人と車の王国だ。渋滞中の車より、通行人の足の方が速いから面白い。都市というのは、自然法則に逆らうためにつくられた反作用の国なのかも知れない。

つい最近設置されたモニターの周囲には闇の肉腫みたいな人垣が出来ていた。

街灯とネオンとショーウィンドーの光が、集まった連中の顔を多色刷りの仮面に変えている。そっちを見ても飽きそうになかったが、おれは一応、五〇インチの画面に眼をやった。

人目を引くのはもつともだ。

碁盤みたいな顔をしたアナウンサーの背後には、

「連続失踪事件解明か。行方不明者戻る」

と白文字のテロップが流れていた。